

# 2026年度 春季人権啓発行事

下記の要領で、人権問題に関する講演会を開催します。

一般の方も参加費・申し込み不要での参加が可能となっておりますので、奮ってご参加ください。

※満席の場合はお席をご用意できない可能性がございます。あらかじめご了承ください。

4月15日(水) 第3時限 (13:00~14:30)	テーマ：笹子トンネル事故と組織罰—事故遺族として思うこと— 概要：松本ご夫妻は、2012年の笹子トンネル天井板崩落事故でご令嬢を亡くし、事故の遺族として事故調査や組織罰のあり方等を考える継続的な活動に取り組まれている。この講演では、大切な人を事故で喪うとはどういうことか、遺族であり続けるとは如何なることかについて、当事者としての思いを語っていただくとともに、重大事故に係る原因究明や再発防止の課題についてもお話いただく。本講義は社会安全学部に入學したばかりの1回生を対象とした必修科目であり、事故を単に客観的な分析対象としてのみ捉えるのではなく、被害や影響を受ける当事者の視点を踏まえることの重要性を新入生に啓発することを目的とする。 講師：松本 邦夫 氏（笹子トンネル事故遺族 組織罰を実現する会 副代表） 松本 和代 氏（笹子トンネル事故遺族 組織罰を実現する会 会員） 場所：高槻ミュージックキャンパス ミュージックホール
5月12日(火) 第4時限 (14:40~16:10)	テーマ：「子どもの貧困」の本質的な解決に向けて～子ども・若者支援の現場から、社会を変える挑戦～ 概要：日本における「子どもの貧困」は、単なる経済的困窮の問題にとどまらず、家庭環境や地域資源、教育機会、人とのつながりなど、複合的な要因が絡み合っている。表面的な支援だけでは解決が難しく、子ども一人ひとりの背景に目を向けた、長期的かつ構造的なアプローチが求められている。本講演では、認定NPO法人 Learning for All が兵庫県尼崎市内を中心に取り組んでいる、子ども・若者支援の現場実践から考える「子どもの貧困」とは何か、その本質的な課題はどこにあるのかを伝える。また、支援を「特別な誰かが行うもの」として切り離すのではなく、大学生や地域の大人、行政、企業など、多様な立場の人が関わることの重要性と、その実現に向けて「自分たちに何ができるのか」「どのように社会を変えていけるのか」を考える。 講師：多田 理紗 氏（認定NPO法人 Learning for All 子ども支援事業部マネージャー） 場所：千里山キャンパス 第3学舎 A301 教室
5月14日(木) 第4時限 (14:40~16:10)	テーマ：子どもの教育における人権 概要：近年、日本では「こども基本法」施行や「こども家庭庁」発足など、子どもの権利を守る法整備が進んでいる。国際的にも、国連が自然環境に関する子どもの意見を尊重すべきという指針を示しており、未来の環境問題に直面する子どもたちの声を重視する必要がある。「子どもの権利条約」の精神に基づき、子どもを一人の独立した人格・主権者として尊重することが求められている。講演では、ブラック校則や大人の都合による管理教育を否定し、子どもの意見表明権や「生きる・育つ・守られる・参加する」権利の保障について話をさせていただく。 講師：尾木 直樹 氏（臨床教育研究所「虹」所長、教育評論家、法政大学名誉教授） 場所：堺キャンパス SB301 教室
5月21日(木) 第2時限 (10:40~12:10)	テーマ：私たちが見たパレスチナ—占領下に生きる人びとと暮らし— 概要：1948年のイスラエル建国以来、多くのパレスチナ人が故郷を追われ、難民となってきた。2023年10月に開始された大規模侵攻では、ガザ地区の徹底的な破壊とジェノサイドが続いている。日本でも、破壊された街や戦闘の様子がカメラを通じて伝えられるが、そうした映像から破壊される前のパレスチナの様子や人々の暮らしをイメージすることは困難だ。本講演では、実際にパレスチナに滞在し、人々との繋がりを育んできたマクルーバのメンバーを招いて、占領下に暮らす人々と暮らしについてお話を伺う。市民目線からパレスチナの人々の暮らしを知り、考えることで、より多くの人々がジェノサイドという重い現実を日本に暮らす私たちと確かに繋がるものとして想像し、理解する一助となれば幸いである。 講師：鈴木（矢野） 可奈子 氏（パレスチナとつながる写真展 PROJECT マクルーバ ボランティア） 高橋 智恵 氏（架け箸 代表） 安岡（村上） 麻衣 氏（パレスチナとつながる写真展 PROJECT マクルーバ ボランティア） 場所：千里山キャンパス 第1学舎 E403 教室

<p>5月25日(月) 第5時限 (16:20~17:50)</p>	<p>テーマ：人道危機と私たちの世界  概要：ロシアによるウクライナへの侵攻やパレスチナ・ガザ地区で続くイスラエルとの戦闘など、世界各地で繰り広げられる武力行使と紛争は、日本で暮らす私たちには遠い場所での出来事のように、実感がわかないもののように思われるが、日々の暮らしに密接に繋がっている。またそこで続く人道危機も見過ごしていると、遠からず影響を受けるかもしれない。そんな問題に対して私たちがなし得ることは何かを、考えてみる機会としたい。  講師：須賀川 拓 氏 (株式会社 FACT FORCE 代表、戦場ジャーナリスト)  場所：高槻キャンパス TE ホール</p>
<p>5月26日(火) 第4時限 (14:40~16:10)</p>	<p>テーマ：探究で復興と向き合い、未来を考える—石川県立輪島高等学校の取り組み  概要：災害の危険を唱え防災教育を施すだけでは、若者たちに暗い未来像を植え付けるだけで希望を持たせることができない。能登半島地震と豪雨災害から何度も立ち上がってきた輪島高校の生徒たちに、未来を見つめさせ希望をもたせることができた「総合的な探究の時間」の取り組みを題材に、探究型学習が担う本来の姿とその目指すものを説く。  講師：平野 敏 氏 (石川県教育委員会)  場所：千里山キャンパス 第1学舎 E402 教室</p>
<p>6月16日(火) 第3時限 (13:00~14:30)</p>	<p>テーマ：「自分らしさ」は誰のものか—ルーツ、まなざし、表現の自由  概要：京都で生まれ滋賀とハワイで育ち、日本とアメリカの文化的背景を持つ俳優／フォトグラファー 古屋呂敏さんの歩みを切り口に、アイデンティティと表現の関係を考える講演だ。人はしばしば、見た目や属性、肩書きによって「こういう人だ」と決めつけられる。しかし表現とは、本来、他者が貼るラベルではなく、自分の言葉や作品で「私はこう生きている」と示していく営みでもある。写真や映像、演技を通して、自分自身や他者をどう捉え直してきたのかを語りながら、多様性の尊重を「知識」としてではなく、「一人ひとりの生の輪郭に触れること」として捉え直す。表現の自由を、単なる権利論で終わらせず、「語る自由」「語られすぎない自由」「誤解されないために対話する自由」へと広げる内容である。  講師：古屋 呂敏 氏 (役者、フォトグラファー)  場所：千里山キャンパス 第3学舎 D302 教室</p>

※実施場所は履修状況等の影響により、変更する可能性があります。最新の情報は[イベントカレンダー](#)にてお知らせいたしますので、必ず事前にご確認のうえ、お越しいただきますようよろしくお願いいたします。

2026年4月  
関西大学